

# 「釧路港舟漕ぎ大会」の取り組みと今後の展望

The action of "the Kushiro port boat row meet" and the future prospects

釧路港舟漕ぎ大会実行委員会

本年9月に3回目の開催となった釧路港<sup>ふねこ</sup>舟漕ぎ大会は、北海道の短い夏<sup>おうか</sup>を謳歌・燃焼する、地元の活性化のために企画されたイベントである。

港町は港祭りで代表されるように、かつては港と市民のきずなは強かった。しかし、近年においては行政区域の拡大と住民意識の変化に伴い希薄なものとなってきている。

港と住民の距離を縮め、さらに地元へ元気・活気・景気を取り戻すために、港を利用した市民参加の釧路港舟漕ぎ大会を計画、実施してきた。

釧路港舟漕ぎ大会は、国土交通省北海道開発局の地域協働プロジェクトにも位置付けされているが、本年10月にはNPOユニバーサル社会工学研究会の主催する「水辺のユニバーサル・デザイン大賞2007<sup>\*1</sup>」奨励賞を受賞した。

本稿においては、この釧路港舟漕ぎ大会立ち上げの経緯、目的、実施状況、今後の展望について紹介する。



( イ メ ー ジ 図 )

釧路港舟漕ぎ大会とは、長さ8m、幅1.8mの舟を漕ぎ手6名、声掛け1名、旗持ち1名、計8名で片道100m、往復200mの距離を競技する。舟は舵がないため、漕ぎ手の息が合わないと蛇行し、力の強い者が必ずしも勝つものでなく、チームワークの良い者が勝つ、ハプニングとユーモラスに富んだ競技。

※1 水辺のユニバーサル・デザイン大賞：ユニバーサルデザインの基本コンセプトに「市民の最大限の参画の実現」の視点を採り入れ、超高齢化における「安全、快適でより高度な社会基盤」の向上、「地域の活性化」に寄与することを目指す「水辺のユニバーサルグッドデザイン」を希求して設けられた賞。



大会開催場所となった幣舞橋より釧路川の上流を望む

## 1 はじめに

釧路の市内を流れる釧路川は、昔は水運に利用され、また港のない時代は河口港として利用されてきたが、新釧路川の開削により、完全な自然運河となった。この河畔の両岸の整備が進み、市民の憩いの場となり、舟漕ぎ大会の開催場所としては最適な環境となっている。

舟漕ぎ大会開催の趣旨は、港を市民の場として活用し、釧路港と舟漕ぎ大会の開催場所である釧路川の自然運河の素晴らしいさを分かってもらい、釧路の元気・活気・景気を取り戻すことにある。

この舟漕ぎ大会の構想については、10年前より港湾関係者で語られてはきたが、実行できなかった。その理由は組織的な取り組みが行われなかったことにある。今回、釧路で開催できたのは、その受皿（組織）があったことが大きな要因である。

釧路には、釧路港西港第二期工事に併せて、技術的な諸問題を解決すべく、平成10年に地元建設会社を主体として40社で設立された「根根地域港湾・漁港技術研究会」があり、この研究会が舟漕ぎ大会の実施を平成16年度の事業として取り組むことを決定した。そして、同年6月、まず研究会内に「舟漕ぎ大会準備委員会」を設け、実施における課題を整理することとした。

## 2 取り組みの課題と経過

準備委員会では、まずどのような競技とするかについて検討するために、現在行われている全道の舟漕ぎ大会について実態調査を行った。その結果、根室・江差・浦河・南茅部・霧多布（平成16年当時）で実施していて、競技方法はそれぞれ異なっていることが分かった。

検討の結果、イメージ図にあるような根室港方式で行うことを決定した。これは、将来の全道大会開催を想定すれば、同じルールにした方が有効ということが理由の一つである。そのほか、開催場所、競技舟の建造、開催日、運営資金、運営関係者の人数・手配等々について検討を行い、翌平成17年3月に「釧路港舟漕ぎ大会実行委員会」を立ち上げた。

実行委員会会長には濱谷一生、顧問に釧路市長・北海道開発局釧路発建設部長・釧路支庁長・釧路海上保安部長・釧路市教育委員会教育長・関係諸官庁、幹事は商工会議所・商店街代表・市民団体など、市民参加の幅広い組織とした。

実行委員会では、第1に安全、第2に運営は直営（ボランティア）、第3に継続的改善（PDCA<sup>※2</sup>）を行い、市民に楽しんでもらうことを基本理念とすることとした。

## 3 第1回大会から第3回大会の実施状況

### 第1回大会

第1回大会は、資金の関係で根室からの借用舟で開催した。根室と同じルールとしたことが結果的に役立ったことになった。舟の先端の白鳥は根室のマスコットである。大会は平成17年8月6日(土)に開催された。

初めての大会で市民に周知されていないということから、PRを新聞、テレビ、ラジオ放送、ポスターなどで行った結果、募集40チームに対し、45チームの応募があった。募集要領では先着40チームで締切としていたが、応募者の強い要望で45チーム（1チーム：補欠1を含む9名×45チーム＝405名）全員の出場を決定した。



根室からの借用舟、マスコットは白鳥（第1回大会）



白熱したレース（第1回大会）

応募者にはKCM<sup>※3</sup>ベトナム・中国研修生チーム、平均年齢70歳という釧路船員OB会チーム、官庁などの多様なチームがあった。ちなみに、優勝賞金は一般の部20万円、女性の部10万円（第2回大会から、第1回は5万円）である。

舟漕ぎ大会は、陸上のイベントと違い、特に天候により、その成否が左右され、雨のほか、波の条件も加わり、特に安全に配慮しなければならないという、大会運営者に課せられた条件は厳しいものとなっている。天候については、大会の1週間前からその動向に一喜一憂させられ、まさに神に祈る思いである。開催日当日は、今まで釧路にはないといわれるような真夏日となり、関係者の思いが天に通じた結果となった。

9時からの開会式では、来賓は釧路市長、釧路開発建設部長をはじめとする8名、競技者405名、応援者・観客1,000名、運営関係者80名、参加者総数約1,500名という規模であった。

※2 PDCA：plan-do-check-act cycle。生産管理や品質管理などの管理マネジメントサイクル。計画、実施、点検・評価、処置・改善の4段階を順次行って一周ごとにサイクルを向上させて、継続的な業務改善をしてゆく。

※3 KCM：釧路コールマイン(株)。太平洋炭礦(株)閉山の後を受けて、平成13年12月、釧路市財界関係者が出資、設立した。主要業務は、①アジアからの受入研修・海外への派遣研修、②営業採炭、③廃棄物中間処理事業・環境リサイクル事業等新規事業分野の開発を行う会社である。

レースは、来賓8名と大会長によるピストル宣言で開始された。

一般の部は35チームにより予選が行われ、上位15チームによる準決勝をタイムレースで行った後、上位5チームにより決勝（順位戦）を行った

女性の部はタイムレースのみで優勝を競うもので、女性特有の甲高い声援の多い中で10チームにより行われた。特に女性は衣装で勝負することもありて人気があった。

この競技の様子が女性アナウンサーにより実況中継されたが、この実況がユーモラスであり、大いに大会を盛り上げた。

競技結果は、ラピッツが優勝、KCMベトナム研修生チームが2位、釧路船員OB会チームが3位で、体育会系チームの海上保安部・自衛隊に勝ち、またさらに舟が逆走するなど数多くのハプニングで爆笑を呼んだ。まさに、この舟漕ぎ大会の目的とする柔よく剛を制すチームワークの良いチームが勝利したのである。

## 第2回大会

第2回大会は、各運営担当者からブレインストーミングの方法で第1回大会の反省点を出してもらい、さらに競技者・観客のアンケート結果なども踏まえ、高校生枠として5チームを設け、第1回大会より15チーム増やした60チームとしたが、予定した数の応募チームが集まった。また、競技舟を新たに5隻建造し、これらにより大会前の20日間ほどデモンストレーションを兼ねて釧路市内の春採湖で練習日を設けた。

第2回大会は平成18年8月5日(土)に開催された。第1回大会同様快晴に恵まれ、真夏日となった。出場者は540名（1チーム9名×60チーム）で、運営関係者160名、応援者・観客1,500名、参加者総数約2,000名と、いずれも第1回大会より大幅に上回った大会となった。

競技結果は、第1回大会優勝チームのラピッツが連覇、2位夫婦舟+3、3位チーム阿寒湖温泉。KCMベトナム研修生チームは前大会のメンバーが帰国し、総入れ替りとなったためか、15位となった。また、釧路船員OB会チームは惜しくも準決勝で6位となり決勝に進めなかった。



新造した舟、マスコットは丹頂鶴（第2回大会）



写真コンテストの動機となった写真（第2回大会）

## 第3回大会

第3回大会は平成19年8月4日(土)の開催で準備が進められたが、台風の直撃を受け、危惧していたことが現実となった。このため順延し、9月1日(土)に開催した。また、順延に伴い出場を予定していた65チームに都合を打診した結果、53チームが参加することとなり、出場者477名（1チーム9名×53チーム）、運営関係者130名、応援者・観客1,500名、参加者総数約2,000名となった。また、第2回大会同様にデモンストレーションを兼ねた練習日20日間を設け、練習場所に大会開催場所の釧路川を加えて実施した。

競技結果は、連覇中のラピッツが3連覇を果たし、2位夫婦舟+3、3位花咲号チームとなっている。なお、KCMベトナム研修生チームは5位と健闘、釧路船員OB会チームは8位と健在ぶりを示したが決勝には進めなかった。



写真コンテスト最優秀作品「小さな応援団」(第3回大会)



写真コンテスト最優秀作品「みな・こぐ・くしろ」(第3回大会)



写真コンテスト最優秀作品「円陣」(第3回大会)

第3回大会から新たに、釧路港舟漕ぎ大会「写真コンテスト」を行った。テーマは競技、観客、ハブニングとし、それぞれ最優秀賞1作品と佳作5作品を選んだ。また、第3回大会の写真コンテスト最優秀作品「小さな応援団」にあるような幼稚園児による審査での賞を設け、釧路市内にある釧路わかくさ保育園の最年長児14名に審査をお願いし、これを参考に決定した。

#### 4 大会の理念と今後の展望

この舟漕ぎ大会に限らず、イベントは継続することが重要であるが、ときとして継続そのものが目的となり、大会関係者のためのイベントと勘違いし、マンネリに陥っている例が数多く見受けられる。

したがって、これを他山の石として、観客を含めた参加者全員に喜ばれるように、常に改善を行っていくことが大切であり、関係者はそのことを肝に銘じて運営していかなければならないと考えている。

これまで3回の実施状況を統括すると、第1回、第2回は手探りの状況であったが、計画したとおり実施ができ、競技者・観客には3回とも満足度平均94%という高い評価を得た。

第3回は台風の影響をみて開催か延期かという決断を迫られたが、そのときの決断のより所は延期という、もう一度のチャンスがあるということであった。結果的に当初の開催予定日は一日中ぐずついた天気となり、競技者・観客に喜ばれず、また安全に対しても疑問の残るものになったと考えられる。この反省を踏まえて、市民に周知される5回目までは中止ではなく、順延の方式を取ることに決定した。

釧路港舟漕ぎ大会は、釧路の元気・活気・景気を取り戻すことを目的としているが、元気・活気は釧路の市民に対してのことで地産地消であるが、将来的には、この釧路港舟漕ぎ大会が観光資源（釧路運河を含めた）になり、交流の場として、そのことが釧路の景気を取り戻す一助となること、さらにこの舟漕ぎ大会が全道の港に普及し、全道各港の持ち回りで全道大会が開催され、全道にその元気・活気・景気の輪が広がっていくことが究極の目的である。